

ファン・ゴッホ生成変容史 — 相続 作品伝播 美術市場 文化産業 —

園府寺 司 (大阪大学)

従来、画家の「受容史」研究はそのほとんどが批評史と絵画的影響史であり、対象地域も限られていた。しかし、批評が画家像の生成に果たした役割は限定的であり、特に初期数十年においては、作品の伝播や偏在の方がはるかに大きな意味を担っていた。それらが本格的に研究されてこなかったのは、単にデータの量と精度が十分に揃えられなかったからにすぎない。

本発表ではまず、ファン・ゴッホの最晩年から今日に至るまで、その作品が展覧会、相続、売買、美術館入りなどを通じてどのように世界に伝播していったかを、収集した包括的データをもとに表、グラフ、地図によって示す。具体的には展覧会数、展覧会作品数、美術館入りした作品数を都市、国、年別に示し、どのような時代的、地政学的傾向が見られるかを分析し、作品伝播に影響を与えた要因として、戦争、景気変動、地理的要因、大コレクションの動静、言説上のコネクター、出版・映画、文化産業、税制、美術館民営化などをあげ、それらがどう絡み合っただけでなく地政学的偏在と変遷を生じさせたのかを論じる。オランダの全年代、初期フランス、20 世紀前半のドイツ、1934 年以降のアメリカ、1945 年以降のスイス、1980 年以降の日本に焦点を当てる。

ファン・ゴッホの作品伝播、画家像形成には遺族がきわめて大きな役割を果たしてきた。オランダはファン・ゴッホ家の円滑な相続にクレラー＝ミュラー・コレクションの形成も加わって、展覧会数、美術館所蔵作品数ともに圧倒的に多く、世界での展示回数最上位の油彩画 50 点もこれらのコレクション作品が独占する。しかし、20 世紀初頭に限れば、展覧会数、美術館所蔵作品数はドイツの方が多く、これにはドイツの文化的イデオロギーが密接に関わっていた。その後はアメリカとスイスにおける増加が顕著になる。両国に共通する要因としてはドイツからの作品流出のほか個人コレクターの美術品寄贈に関わる文化や税制も考えられる。また、1930、50 年代アメリカにおける展覧会数の急増には伝記小説と映画の成功が大きく影響している。これらの時期に作品購買者層の変化、市場価格の高騰、美術館入り作品の増加、売買市場から貸借市場への移行、文化産業化、美術史家の関与などが急速に進む。

このような状況は展覧会の内容や画家像、作品観の変容にも影響し、展覧会はそれまでの回顧展との差異化を図ったテーマ展に変わった。かつてホルクハイマー/アドルノが「文化産業」で指摘した通り、収益を約束された「テスト済み」の画家が繰り返し「文化産業によって適度な粉飾をほどこされ、本来なら抵抗感を持つ大衆に向かって値引きして流し込まれる」ことになった。

画家の生成変容史上における関与者の変遷や作品価格の変動にもふれるとともに、現代までの作品伝播を世界地図で概観し、美術の「グローバル」市場などと呼ばれるものが、いかにごく一部の限られた地域の現象に過ぎないかも示しておきたい。